

# 国際理論研究におけるパワー概念の 「アメリカ的受容」(3)

## パワー論争の多元化と収斂

赤 坂 一 念

はじめに

### 1. パワー論争の多元化

- (1) 立場AおよびB
- (2) 立場C主導による新たな試み
- (3) 立場Gによる立場A、BおよびC批判
- (4) 立場Aによる立場G批判
- (5) 立場Gによる反論

### 2. パワー論争の収斂

- (1) 立場Dによる立場AおよびB批判
- (2) 立場Eによる折衷化の試み
- (3) 立場Fによる折衷化の試み
- (4) 立場AおよびBの変化
- (5) パワー概念の「アメリカ的受容」

おわりに

はじめに

筆者は前稿において、アメリカ国際理論研究におけるパワー概念の覚醒・受容をめぐる諸立場を、次頁の表に示したとおり、立場A(集団安全保障擁護論)、立場B(デモクラシー擁護論)、立場C(政策科学論)、立場D(国内問題優先論)、立場E(折衷論)、立場F(国家安全保障論)、立場G(勢力均衡擁護論)の7つ(実質的には9つの立場)に分類したが、この作業によって、1930年代後半から1940年代前半にかけての時期におけるパワー概念の覚醒・受容をめぐる多元的性格と、その相対的な位置関係を確認することができた<sup>1)</sup>。そこで本稿では、この分類を用いることによって、以下、パワー概念をめぐる論争状況(パワー論争)を、その多元化と収斂に注目しながら概観していきたい。

### 1. パワー論争の多元化

#### (1) 立場AおよびB

すでに前稿で指摘したように、アメリカ社会は旧体制に対する「新世界」として、ヨーロッパの旧体制に対する「新体制」の担い手としての自己像を描いてきた。このような精神構造の中でリベラリズムは「アメリカの保守すべき思想」とみなされ、アメリカ社会に

表 パワー論をめぐる7潮流

立場	「パワー」の意味	勢力均衡の意義(契機*)	パワー・ポリティクスへのアメリカの対応策	パワー論登場の年代およびその代表的研究者
A: 集団安全保障擁護論	「平和強制力」(軍事的要素の強調)	低(対立)	普遍的な国際機構によるパワーの一元的管理・一元的行使を要請	30年以前……ライト(1921, 22) 30年代……ライト(1930, 34, 35, 36) シューマン(1931, 33, 36) ステイラー(1935, 37, 38, 39) ラッセル(1936) ベンカー(1937) スタイナー(1940) 40年代前半……ライト(1942, 43, 44) ステイラー(1942) マッキンバー(1943)
B: デモクラシー論	平和を組織化する事実上の国力(軍事・経済的要素の強調)	中(対立・調整)	B(1): デモクラシー諸国への支援/デモクラシー諸国による国際協調を要請 B(2): デモクラシー諸国による大同盟を通じたパワー行使を要請	30年以前……ラインシュ(1900) 30年代……マンロ(1933) ライス(1938) 40年代前半……ブナナウアー(1941) 30年以前……リアアマン(1915, 17) 30年代……リアアマン(1938) 40年代前半……ゲルハバ&グーチ(1940) シューマン(1940, 42, 45) ベンカー(1943) リアアマン(1943, 44)
C: 政策科学論	諸価値を賦与・剥奪する事実上の強制力	中(対立・調整)	パワー・エリートによるプロパガンダもしくはシンボル操作を要請	30年以前……ラズウェル(1927) 30年代……ラズウェル(1935) 40年代前半……ラズウェル(1941)
D: 国内問題優先論	事実上の国力(政治・経済的要素の重視)	中(対立・調整)	モンロー主義の再評価による抑制的外交を要請	30年以前……ピアード(1914) 30年代……ピアード(1934) 40年代前半……ピアード(1940, 42, 43)
E: 折衷論	事実上の国力(諸要素・諸資源の総体)	中(対立・調整)	国家主義と集団安全保障の所表化の概念/集団安全保障と勢力均衡の巧みな結合の上でのパワー行使を要請	30年年代……フリートリヒ(1938) 胡適(1938) カー(1938) シャープ&カーク(1940) 40年代前半……ニューバー(1940, 44) ハーツ(1942) カーク(1944, 45)
F: 国家安全保障論	意図する目的を達成する国力(諸要素・諸資源の総体)	中(対立・調整)	F(1): イギリス型のバランスとしての役割を要請 F(2): 国家安全保障の執慮によるパワー・ポリティクスへの選択的関与を要請	30年以前……ロジャーズ(1925) 30年代……シモンズ(1931, 33, 35) エムニー(1934, 37) シモンズ&エムニー(1935) 40年代前半……フアークツ(1941) エムニー(1943) 30年以前……アール(1923) 30年代……ダン(1937) アール(1938, 40) ファイス(1938) スプラウト(1939, 40) 40年代前半……アール(1941, 43) スプラウト(1942, 45) フォックス(1944)
G: 勢力均衡擁護論	国力(諸要素・諸資源の総体; 強制力と非強制力の複合体)	高(対立・調整・安定)	外交を通じた不断のパワー関係の調整(勢力均衡)を要請	30年代……スバイクマン(1933, 34, 38, 39) モーゲンソーン(1939) ウォルブナーズ(1940) 40年代前半……ウォルブナーズ(1942, 45) スバイクマン(1942, 43, 44) シムラウス・ヒューベ(1942, 45) モーゲンソーン(1942, 44)

\* 「勢力均衡」の項目の括弧内における下線部分は、勢力均衡の意義をめぐる認識の根拠として、研究者がより強調・重視する勢力均衡の契機を意味する。

においては、その遍在性と強靱性を確認することができる<sup>2)</sup>。

それでは、アメリカのリベラリズム的伝統が、いかなる形でアメリカ国際理論研究におけるパワー概念の覚醒・受容と結びつくのであろうか。そこでパワー論争を具体的に概観する前に、まずは立場AおよびBのパワー論をリベラリズム的思考の典型とみなすことによって、この結びつきを確認しておきたい<sup>3)</sup>。

まずその第1は、立場AおよびBのパワー論に顕著に見られるように、パワー・ポリティクスを「先祖がえり」「旧世界的現象」「理性のアンチテーゼ」「理性への反逆」あるいはアメリカの正統的な思想になじまない「邪悪なもの」として捉え、これをアメリカ的諸価値(自由やデモクラシーなど)によって啓蒙することで変革していこうとする姿勢である。

その第2は、政治組織の整備・充実による社会的正義の実現を希求するウィルソンの国際主義に対する高い支持と集団安全保障に対する高い信頼感(あるいは国家の自助努力に対する不信感)から、普遍的な国際機構の紛争解決機能に対する期待が高いことである。このような姿勢は、例えば、集団安全保障体制の再構築による「パワー」の一元的管理を要請する30年代の立場Aのパワー論(ライト、シューマン、ラッセル、ベッカー、ステイリー)」、さらには「パワー」を「平和強制力」あるいは「国際警察力」とみなすことによって再解釈し、その一元的行使を、彼らが戦後構築されるべきと主張するところの普遍的国際機構に要請する40年代前半以降の立場Aのパワー論(ライト、マッキーバー、ステイリー)に顕著に見られるものである。

その第3は、デモクラシーに対する絶対的な信頼感である。すなわち、デモクラシーは、他の政治システムと比較して生来的に平和愛好的であるという確信から、デモクラシー諸国から構成される国際システムに恒久平和の条件を認めることである。それはアメリカ的生活様式に対する自負心と旧世界に対する優越感から、アメリカが体现する諸価値を世界大に適用することによって変革を試みようとする一種のメシア信仰(messianism)的信念の表明である。このような干渉主義的姿勢は、例えば、アメリカのパワーを、ヨーロッパのデモクラシー諸国を支援する目的あるいはデモクラシー諸国を中心とした国際的な協調政策を推進する目的で用いるべきであると主張する30年代前半以降に本格的に登場した立場B(1)のパワー論(マンロ、ライス、プラナウアー)」、あるいはこの主張をさらに積極化させ、デモクラシー諸国から構成される「平和愛好国家(群)へのパワーの蓄積」、つまり共通の価値観を有しなおかつ圧倒的な「パワーの優勢」(preponderance of power)を有する「安定的な恒久的同盟」(大同盟)に「平和を組織化するパワー」の行使を要請する、30年代末に本格的に登場した立場B(2)のパワー論(リップマン、シューマン、ゲルバーとグーチ、ベッカー)』にとりわけ顕著に見られるものである。

## (2) 立場C主導による新たな試み

このようなりベラリズムという共通の価値観あるいは思想的一体感のもとで倫理が自明のものとなっている場合には、すべての問題が技術の問題としてあらわれてくる。そこでは、政治は技術の問題となる。ここに、アメリカ的諸価値の擁護・実現の手段あるいは「より良い社会」を実現するための手段として、パワー概念を経験主義・道具主義的に把握する新傾向が、30年代前半以降、ラズウェルの主導のもとで立場Cとして登場してくる<sup>8)</sup>。この新傾向は、パワー・ポリティクスからデモクラシーを擁護するというリベラリズムの運動論的特徴を立場AおよびBと共有しつつ、当時のモダン・ポリティカル・サイエンス

の「シカゴ学派」における研究成果であるパワー概念を国際的文脈にまで敷衍・適用させ、パワー概念の操作化を試みることによって、「科学としての政治学」構築のための方法論的模索（世界政治過程の分析）を開始するものである。これらの試みは、リベラリズムの運動論的姿勢に、パワー概念を経験主義・道具主義的に把握するプラグマティズムの方法論が結合したものであるといえる<sup>9)</sup>。

### （3）立場Gによる立場A、BおよびC批判

このような立場A、BおよびCの一連の試みに対して、30年代半ば以降に登場した立場Gは、立場A、BおよびCという当時の主流的立場に対する挑戦者として、リベラリズムの外部からそれらを批判しその超克を試みるものである<sup>10)</sup>。この試みは、アメリカの政治思想的伝統つまりリベラリズム的伝統の強さに対する大陸ヨーロッパからの移住・亡命研究者による挑戦・批判という緊張関係の中で相対的に浮き彫りにされる。

このリベラリズム超克の試みは、例えば、スパイクマン、ウォルファーズ、モーゲンソーあるいはシュトラウス・ヒューベなどの大陸ヨーロッパからの移住・亡命研究者が、パワー・ポリティクス of 遍在性・必然性・不可避性、「必然性と道義の相いれない要求」というディレンマに直面しつつも「パワー」をもってインタレストの調整・調和を試みる必要があること、大陸ヨーロッパの伝統的な調整・安定原理である勢力均衡の意義、ドイツの地政学的発想に対応する政治戦略を構築することの意義をそれぞれ強調することによって展開された<sup>11)</sup>。

彼らは、このような大陸ヨーロッパのパワー・ポリティクス思想を「現実主義」という形でアメリカに移植することによってリベラリズムの超克を試みたが、そのリベラリズム批判の骨子は、「孤立主義」と「干渉主義」（国際主義）との論争はともに「理想主義」的であり、その論争は不毛であること（スパイクマン、ウォルファーズ）、アメリカは、とりわけ「孤立主義の幻想」から覚醒すべきであること（シュトラウス・ヒューベ）<sup>12)</sup>、パワー・ポリティクスを理性・法律・倫理の対立物とみなす見解は誤りであること（モーゲンソー）<sup>13)</sup>の3つである。

### （4）立場Aによる立場G批判

これに対して、リベラリズム側からの反論が見られた。例えば、42年になされた立場Aのステイリーによる立場Gのスパイクマン批判がそれである<sup>14)</sup>。ステイリーは、第二次世界大戦中における戦争への対応および戦後秩序をめぐる政策論争において、立場B(2)に属するシューマンのパワー論を支持する観点から、スパイクマン批判を展開した。

このなかでステイリーは、スパイクマンの主張を、戦後アメリカの世界政治における基本戦略がどうあるべきかということではなく、ただ単に、いかにしてパワー・ポリティクス・ゲームを遂行するのかということに関する議論とみなすならば賞賛に値するかもしれないが、たとえそうであるとしても欠点があり、またそのうちのいくつかは深刻なものであるとして、次のような批判を展開している。

「パワー」という言葉を多義的に捉え、時としてそれらを無意識にかつ交換的に使用しているという論理的欠陥があること。

世界連邦あるいは国際協力についての誤った認識が存在すること。

地政学的アプローチは、現実のある側面を誇張し他の側面を意識的に捨象することによって、現実を歪曲しがちであること。

彼がアメリカに対して、ナショナリスティックな「勢力均衡政治」(balance-of-power politics) という古いゲームの遂行を推奨していること。

彼が主張するパワー・ポリティクス・ゲームは、戦争の頻発をもたらすに相違なく、また「均衡化されたパワー」状態も不安定なものであり、それを通じた秩序安定の可能性は、彼によって誇張されたものであること。

デモクラシー諸国は、将来的な均衡を維持するために友と敵とを入れかえるほど冷血的ではなく、また平時において、その経済および教育システムを戦争の策略のために捧げることに気が進まないがゆえに、勢力均衡ゲームに馴染まない政治体制であること。

勢力均衡を信用することは、たとえこの戦争[第二次世界大戦]に勝利したとしても、将来の世界の管理の一部をファシストに委ねることを意味し危険であること。

彼の「現実主義」は、以上の点において「過去の世紀の現実主義」であること。

このように批判した上で、我々の不変の目的は、世界政府がパワー・ポリティクスを廃絶する日を目指して絶えず努力することである、とステイラーは結んでいる。

#### (5) 立場Gによる反論

このような立場Aによる批判を受けて、立場Gのスパイクマンは、自身の主張が歪められて理解されていることに対する反論として、43年に次のような見解を発表した<sup>15)</sup>。

国際関係におけるパワーの重要性を喚起したことで「冷血なパワー・ポリティクス」という侮辱の言葉によって道義的な批判を受けるのは、理にかなわないこと。

ヨーロッパおよびアジアの勢力均衡の維持は、西半球の安全保障の前提条件であること。

勢力均衡に対する私[スパイクマン]の問題関心は、我々のパワー・ポジションに対する関心からだけではなく、ほぼ同等に均衡化されたパワー・システムにおいてのみ集団安全保障が機能するという私の信念によって形成されたものであること。均衡化されたパワー状況においてのみ、共同行動が国際社会のために圧倒的なパワーを創出しうること。

私がヨーロッパおよびアジアにおける勢力均衡を支持するのは、そのような条件下においてのみ、米国が遠く離れて国際秩序の維持に効果的に参加でき、また大洋を横断して小国の領土保全のための積極的な諸責任を請け負うことができるからであること。

正義は、ほぼ同等の強さの国家間で最も行き渡るものであること。

デモクラシーは、パワーの不均衡化が効果的に抑制されうる世界においてのみ確かなものになること。

立場Gは、このように立場Aに反論した。これら立場Aと立場Gの主張は、前掲の表で示されたとおり、パワー論のスペクトルでいえば、それぞれ両極端をなすものである。

## 2. パワー論争の収斂

### (1) 立場Dによる立場AおよびB批判

このようなパワー論争の多元化と並行して、論争状況を収斂させようとする動きも以下のように顕在化した。パワー論争は、第二次世界大戦に直面したアメリカの戦争への対応

をめぐる極限的な政策論争ならびに連合国側の戦線の好転とともに登場した戦後秩序をめぐる政策論争が展開される過程で、収斂へと向かうことになる。

まずは立場D（国内問題優先論）の試みである。この立場Dは、ピアードに代表されるように、第二次世界大戦中の戦争への対応をめぐる政策論争において、リベラリズムの暗部に光を当てることによってリベラリズムの行き過ぎに警鐘を鳴らし、立憲政治の核心は「パワーの制限」であるとして「デモクラシーのパワー」に対しても制限が必要であることを主張するものである<sup>16)</sup>。

その主張は、モンロー主義的な「初期の適切かつ抑制的な外交」への回帰を要請する観点（大陸主義）から、例えば、良き戦争と悪しき戦争とを区別し、自らが承認する戦争は正しいキリスト教的戦争であるとする「文明のための世界十字軍」的考え方、「アメリカには世界文明を指導するという世界的使命がある」とする「ウィルソンの国際主義」、「武力行使による世界的使命」を正当化する考え方、世界恐慌後のルーズベルトに対する大統領権限の過度の集中と彼の対外政策に見られる「国際主義と帝国主義の連携」をそれぞれ批判するものである<sup>17)</sup>。

この立場Dの試みは、当時学界の主流を形成していた立場AおよびBに対するリベラリズム内部からの批判である。換言するならば、これは国際主義的あるいは干渉主義的リベラリズムに対する、反国際主義的あるいは非干渉主義的リベラリズムからの批判であったといえる。なお、このような国際現象に対する消極的関与を要請する立場Dの主張は、アメリカの第二次世界大戦への参戦によって事実上その存立基盤を失うが、後述するように、その主張の一部が立場Fによって継承されることになる。

## （2）立場Eによる折衷化の試み

この立場E（折衷論）は、30年代末以降の論争状況において、例えば、「パワーと道義」、「現実主義と理想主義」、あるいは「勢力均衡と国際連盟」などのしばしば対置的に扱われる理念の客観的把握を試みる作業を通じて、その対立物の折衷・調和を模索するものである<sup>18)</sup>。

例えば、「シニシズムに陥りがちな現実主義」と「感傷的になりがちな理想主義」の融合を模索する試み（ニーバー）、同じデモクラシー・キリスト教国家である英米に見られる「自らのパワーについての道徳的自覚」あるいは「自らの権力欲に対する批判的抑制」をめぐる態度の相違を指摘し、その態度の比較を通じて、アメリカに対してこれらの自覚を要請する姿勢（ニーバー）<sup>19)</sup>、国際関係におけるパワー要素の無視・軽視は、パワーの濫用と同様に非難されるべきであるという見解（カーク）、「地域間安全保障」制度の創設による勢力均衡の制度的補完（勢力均衡の逸脱阻止）の要請（カーク）<sup>20)</sup>、勢力均衡は、しばしば国際連盟と対置されるが、双方とも平和維持および平和保証のための理念であり、それらは両立しうる理念であるという主張（フリードリヒ）<sup>21)</sup>、国家の主体的関与を維持した上で「組織化された強制力の集団の使用」（普遍的安全保障）を模索する新秩序構想（ハーツ）<sup>22)</sup>がそれである。

これらの主張は、具体的には、立場AおよびBの主張と立場Gの主張の折衷・調和を試みるものであるといえる。しかもこの試みは、例えば、ニーバーに最も顕著に見られるように、アメリカのリベラリズムの伝統を、あらためて西洋世界の政治思想（例えば、イギリスのロック的リベラリズムやパーク的保守主義、あるいは大陸ヨーロッパのパワー・ポ

リティクス思想など)に投影させ比較検討することによって、その矯正およびこれらの長所の折衷を試みるものであったといえる<sup>23)</sup>。

### (3) 立場Fによる折衷化の試み

この立場F(国家安全保障論)は、次の2つの視座の融合を試みることによって論争点の折衷・調和を模索するものである<sup>24)</sup>。

第1の視座は、立場AおよびBに対して、その思考方法におけるリベラリズム的偏向を指摘しその是正を要請するという姿勢である。この立場Fは、30年代後半以降にリベラリズムの外部からその超克を試みた立場Gとの共同研究を通じて、大陸ヨーロッパのパワー・ポリティクス思想によるリベラリズム批判を受け入れ、それ以降から40年代前半にかけて、リベラリズム的思考の偏向性・誤謬性を自覚しこれを指摘するに至った。例えば、

パワー・ポリティクスは軍国主義と同一視され、邪悪で悪い政府の行為としてその道徳的欠陥が指摘される傾向にあるが、それは偏見であるという指摘(ダン)<sup>25)</sup>、「非パワー・ポリティクス(non-power politics)の世界を創設することによってパワー・ポリティクスの問題が解決可能である」とする孤立主義者および国際主義者に見られる「特殊アメリカ的考え方」は「パワー・ポリティクスの洗練された理解ではない」という指摘(フォックス)<sup>26)</sup>がそれである。

このような立場F(2)によるリベラリズム批判は、例えば、43年のアールによる立場A批判<sup>27)</sup>、すなわち、立場Aのライトが、勢力均衡を安全保障上の装置もしくは平和の保証としてみなさず、立場Gのスパイクマンとは対照的に、そこからは何も明示的に得るものがない全くの無責任な政策とみなしていること、同じくライトが戦争を未来の文明から除去しようと考えているモダニズムの信奉者であり、社会科学のアプローチによって未来を操作しようとするを、それぞれ批判するという姿勢に示されているといえる。

第2の視座は、立場Gに対して、アメリカ人研究者としての立場からアングロサクソンの伝統に対する配慮を要請するという姿勢である。これは、例えば、アールの43年論文に見られるように<sup>28)</sup>、スパイクマンの主張を全体的に肯定的に捉えつつも、モンロー主義における孤立主義と勢力均衡政策の共存(立場D)およびイギリス型の勢力均衡政策(F(1))を意味するアングロサクソンの勢力均衡論への過小評価、および道義・イデオロギーへの過小評価に対して不満を表明するという姿勢に示されているといえる。

とくに立場F(2)は、このように一見相反する2つの視座を、アメリカの政治的伝統および地政学的条件のうちに昇華させ、「国家安全保障」という象徴的な言葉を用いることによってその融合を試み、すでに前稿で確認されたように、「軍事上の必然性」とアメリカの「政治的自由」との妥協による国家安全保障研究の有意性とそれにかなう国力研究の意義を強調した(アール、スプラウト)<sup>29)</sup>。

しかも、ここで採用されるパワー・アプローチは、いわば「パワー行使の任い手としての国家の主體的・自律的役割」を強調する観点(集団安全保障あるいは勢力均衡によって他律的に規定されるという観点ではなく)から、国家安全保障上の要請にかなう平和戦略の枠組みづくり(スプラウト)を目指すものであり<sup>30)</sup>、例えば、次のフォックスの指摘に示されるように、パワーと責任の不可分性、軍事力それ自体の道徳的中立性、軍事力行使の善悪判断は対外目的の設定に依拠すべきであることを要請するものである<sup>31)</sup>。と

くに と に見られるように、「パワー」をこのような形で道具主義的に政策の手段として把握し、なおかつその正当性の判断を目的の達成度に求めるという姿勢は、きわめてプラグマティズム的であるといえる。その意味で、立場F(2)は、立場Aから立場Gまでのスペクトルに存在する諸立場の主張を国家安全保障論の範疇で再整理することによって、アメリカのリベラリズム的思想と大陸ヨーロッパのパワー・ポリティクス思想とを、アメリカの思想的伝統であるところのプラグマティズムの観点から折衷・調和させる試みであったといえる。

#### (4) 立場AおよびBの変化

他方、立場AおよびBの主張にも変化が見られた。すでに触れたように、立場Aは、30年代において、集団安全保障体制の再構築による「パワー」の一元的管理を要請していたが、40年代に入ると、これを「平和強制力」あるいは「国際警察力」と再解釈することによって、その一元的行使を、彼らが戦後構築されるべきと主張するところの普遍的な国際機構に要請するようになった。また同様に立場Bも、30年代において、アメリカの「パワー」を、ヨーロッパのデモクラシー諸国を支援する目的あるいはデモクラシー諸国を中心とした国際協調政策を推進する目的で用いるべきであると主張していたが(立場B(1))、30年代末に本格的に登場した立場B(2)は、さらにこの主張を積極化させ、デモクラシー諸国から構成される、共通の価値観を有しなおかつ圧倒的な「パワーの優勢」を有する「安定的な恒久的同盟」(大同盟)に「平和を組織化するパワー」の行使を要請するに至った。

このような立場AおよびBの研究者の中から、主に第二次世界大戦中における戦後秩序をめぐる政策論争において、以下のように、パワー・ポリティクスの遍在性・必然性・不可避性を認める方向でその主張を変化させる研究者が現れた。

その第1は、立場Aのライトが44年の論文において、戦後世界における安全保障の組織化の問題を議論する文脈の中で、新たに「国際安全保障体制」という言葉を使用することによって、その構築に向けた4大国(米英ソ中)の主導的役割を強調するに至ったことである<sup>32)</sup>。その主張の骨子は、次のとおりである。

攻撃国に対するすべての国の共同行動に依存するところの集団安全保障は、国際連盟において制裁が失敗した経験から「国際警察力」によって補強されるべきであること。

我々の任務は、第1に「戦争の勝利」であり、第2に「福利・正義の増進」を究極目的とする「国際安全保障のための基本的諸制度の創設」であること。

そのためには連合、とりわけ4大国(米英ソ中)の主導によって、平和・安全保障・正義の諸原則が公布される必要があること。

ここに、普遍的な国際機構への国家主権(政治権力)の委譲という形をとる「集団安全保障」の意義を強調する従来のライトの見解から、必ずしもその委譲を前提としない「国際安全保障」への主張の力点の移動が確認できる。ここに、立場Eのハーツあるいはカークの主張への接近が認められる。

その第2は、立場B(2)のリップマンが38年の論文以降、「平和の組織化のためにパワーを用いること」を要請する自らの姿勢を「現実主義的な平和主義」(realistic pacifism)を志向するものであると位置づけるに至ったことである<sup>33)</sup>。このリップマンの第二次世界大戦中における戦後秩序をめぐる政策論争における具体的主張は、次の通りである。



「平和を維持しようとする政治家」は、大国と大国の關係に規定されるところの「パワー秩序」(order of power)を無視してはならないこと。

「最も高い段階の安全保障」を達成するためには「圧倒的な力 (preponderance of force) を有する同盟の創造による平和の組織化」が必要であること。

アメリカは「自由などの啓蒙されたインタレストに基づいた新たなパワー秩序」の組織者にならなければならないこと。

この新秩序は、将来的には米英ソ中が協働して「核となる同盟」(nuclear alliance)を創造できるかにかかっていること。

その第3は、同じく立場B(2)のゲルバーとグーチが40年の共著において、アメリカの「自由」によって支えられた勢力均衡政策(長期的にはドイツに対抗する勢力のパワーの優勢)の意義を説く文脈の中で、「パワーは邪悪なもの」として捉えられがちであるが「すでにマキャベリが認識していたように、パワーは政治の本質そのもの」であり、また「公共問題・国際問題における決定要因」であるとして、我々は「パワーが誰の手中にあり、それがどのように使われているのか」について精査する必要があると主張するに至ったことである<sup>34)</sup>。こうした彼らの主張の骨子は、次のとおりである。

「ドイツの力 (strength) への渴望と英仏のドイツの力に対する畏怖」から生じた第二次世界大戦は「デモクラシーのための戦争」であると同時に「勢力均衡のための戦争」でもあること。

そこでアメリカには「自由によって支えられた勢力均衡政策」が求められること。具体的には「主要な鉱物・戦争資源が都合の悪い時に悪の手に渡らないように」するため、他のデモクラシー諸国と協働すべきであること。

この「自由の道具であるデモクラシーの秀逸性を具現化する勢力均衡政策を通じたヨーロッパの回復策」は、アメリカの世論に受け入れられるべきであること。

長期的には「ドイツに対抗する勢力のパワーの優勢」を形成することによって、西洋の安全を確保すべきであること。

その第4は、37年の論文では立場Aに分類されたベッカーが43年の著書において、その主張を立場B(2)に移行させるとともに、パワー・ポリティクスの遍在性・必然性・不可避性を認めるに至ったことである。

ベッカーは、37年の論文において「パワー」を、その戦争における軍事的な発現状況から国家間の平和構築には「邪悪かつ不適切なもの」とみなし、国際連盟による「パワー」の管理の必要性とその加盟国の構成員である「個人」が果たす役割を強調したが、43年の論文では「パワー・ポリティクスは善かれ悪しかれ現実である」と主張するに至った<sup>35)</sup>。その修正後のパワー論は、次のとおりである。

パワーは、絶えず「何らかの将来的な目的のための手段」であるべきこと。

連合国の直接の戦争目的は「日本・ドイツに対する勢力均衡の回復」にあること。

連合国の手中にあるパワーの方が、枢軸国側のそれに比べてより安全であること。

我々の究極目的は「4つの自由」をより効果的に世界に流布すること。

「新たなより良い戦後秩序」もパワーなしには構築しえないこと。

大きなパワーを有する米ソ英中が、そのパワーを賢明に行使する責任を果たすべきであること。

その第5は、ベッカーと同様に30年代を通じて立場Aに分類されたシューマンも、以下に詳述するように、40年の論文でその主張を立場B(2)に移行させるとともに、45年の論文でパワー・ポリティクスの遍在性・必然性・不可避性を認めるに至ったことである。

シューマンは、30年代前半以降、パワー・ポリティクスは、軍事力による戦闘という形をとりやすいこと、勢力均衡は「アナーキーの元凶」であること、パワー・ポリティクスは将来的に「放棄」される必要があること、あるいはそれが不可能な場合には、パワー関係の平和的調整が可能になる方向で「修正」される必要があること、その第一歩として世界市民・世界連邦的思考を鼓舞する「新たな国際主義」を高揚させる必要があることを主張していたが、40年の論文では、「アナーキーの元凶である勢力均衡の代替」として「圧倒的なパワーの優勢」を有する「安定的な恒久的な同盟」を要請し、アメリカがこの同盟の樹立・維持・改革のために「そのパワーにふさわしい責任」を引き受ける必要があること、この同盟が将来的に安定的かつ恒久的であり続けるならば「世界的な勢力均衡に終止符を打ち、アウトサイダーにパワー・ポリティクス・ゲームの放棄を強制できるとして、その主張を立場B(2)に移行させた<sup>36)</sup>。さらに42年の著書でも、同様のパワー論を再論した上で、「パワーの組織化」の中核としての「大西洋デモクラシー諸国の協調・一体化」の必要性を引き続き主張した<sup>37)</sup>。

こうしたプロセスを踏んでシューマンがパワー・ポリティクスの遍在性・必然性・不可避性を認めるに至るのは、45年の論文においてである。ここに、シューマンにおける「パワー概念のアメリカ的受容」ともいべき言説を確認することができる。

すなわち、シューマンは45年の論文において、パワー・ポリティクスの現実から目をそむけることは「平和の組織化」を破壊するとの認識から、「正義(right)と力(might)の結合」を要請し、「平和の組織化」という高次の理念実現のための現実的な妥協策として、パワー・ポリティクスを「安全保障の競合的追求の世界」と再定義するに至った。シューマンにおけるパワー概念「受容」後のパワー論は、次のとおりである<sup>38)</sup>。

目下、主権国家のパワーの分布状況に根底的な変動が進行中であること。

それは大国の数の減少であり、現在、大国は米英ソの3つであること。

「決定力」を保持しているこれら3国がともに行動すれば、地球上の他の主権国家がいかなる形で結合しようとも、平和を乱すには力不足となる。また3国がともに行動しなければ、他に不可能いかなる主権国家の組み合わせも、平和を維持するには力不足となる。したがって、この「米英ソの一体化」としての大同盟(grand alliance)は、「現在建築しうる唯一の平和神殿の礎石」であること。

このような同盟を「非道徳的なもの」あるいは「望ましくない勢力圏の構築につながるパワー・ポリティクス」とみなして妨害する者は、「パワーそのものの冷厳な現実」を無視していること。

この「大同盟」は「平和の組織化の必須条件」であり、ここから「理想世界の組織化」つまり「地球正義の実現」に向けた「新たな機会」が生まれること。

この「大同盟」なしには、法、秩序、平和、いかなる形の正義も存在しえないこと。したがって、我々にできる行動は、「幻想なしに、すべての困難と危険とを明確に認識する」ことによる「より良い秩序と自由の模索」であり、その模索は「人類の最も高級な奉仕活動」であること。

#### (5) パワー概念の「アメリカ的受容」

このような40年代前半の立場AおよびBに見られた変化は、第二次世界大戦中におけるアメリカの戦争への対応をめぐる極限的な政策論争と戦後秩序をめぐる政策論争の過程で、アメリカの国際的地位の変化に対応する形で、大陸ヨーロッパのパワー・ポリティクス思想を部分的かつ条件付きで受容したものであるといえる。こうして、このような段階を踏むことによって、パワー概念の「アメリカ的受容」とでもいえるような一定のコンセンサス（基本的特徴）が、以下のように浮き彫りにされるのである。

その第1は、パワー・ポリティクスの遍在性・必然性・不可避性の自覚である。

その第2は、パワー行使（安全保障）の任い手としての国家の主体的・自律的役割の自覚である。

その第3は、パワー概念を、アメリカ的諸価値（自由やデモクラシーなど）の擁護・実現の手段あるいは対外政策の手段として、道具主義的に把握することである。

その第4は、それとともに「大国としての責任」の自覚から、その責任の範囲・程度をめぐっては見解の相違があるものの、アメリカのパワーを国際社会の安定化のために使用するという合意の形成が見られることである。

その第5は、安全保障の方策をめぐっては依然として主張の隔たりがあるものの、いずれの立場においてもパワー・ポリティクスへの選択的関与を通じた安全保障の組織化を要請することである。

おわりに

以上、パワー論争の多元化と収斂に注目しながら、パワー概念の「アメリカ的受容」へと至るプロセスを確認しその特徴を浮き彫りにしてきた。次稿では、これを踏まえて、その意義を考察する。

注

- 1) 拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(2)- パワー論をめぐる7潮流 - 」『総合政策論叢』第2号、2001年、23-42頁、参照。
- 2) アメリカ社会におけるリベラリズムの遍在性と強靱性については、拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(1)- 先行研究との対話 - 」『総合政策論叢』第1号、2001年、12頁、参照。
- 3) アメリカのリベラリズムの伝統を最も体現している、立場AおよびBのパワー論については、前掲拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(2)」、28-9頁、および後掲文献リスト、参照。
- 4) Quincy Wright, *Mandates under the League of Nations*, Chicago: The University of Chicago Press, 1930; "Is the League of Nations the Road to Peace?" *The Political Quarterly*, Vol.5, No.1, 1934, pp.92-106; *The Causes of War and the Conditions of Peace*, New York: Longmans, Green & Company, 1935; "National Sovereignty and Collective Security," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.186, 1936, pp.94-104; Frederick L. Schuman, *War and Diplomacy in the French Republic: An Inquiry into Political Motivations and the Control of Foreign Policy*, New York: McGraw-Hill, 1931; *International Politics: An*

*Introduction to the Western State System*, New York & London: McGraw-Hill, 1933; “Book Review: Frank H. Simonds and Brooks Emeny’s *The Price of Peace* & Frank H. Simonds’ *American Foreign Policy in the Post-War Years*,” *The American Journal of International Law*, Vol.30, No.1, 1936, pp.172-4; Frank M. Russell, *Theories of International Relations*, New York & London: D.Appleton-Century Company, 1936; Carl Becker, “Loving Peace and Waging War,” *The Yale Review*, Vol.26, No.4, 1937, pp.649-68; Eugene Staley, *Foreign Investment and War*, Chicago: The University of Chicago Press, 1935; *Raw Materials in Peace and War*, New York: Council on Foreign Relations, 1937. (邦訳、山田文雄訳『国際原料資源論』中央公論社、1940年); “Power Economy versus Welfare Economy,” *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.198, 1938, pp.9-14; *World Economy in Transition: Technology vs. Politics, Laissez-Faire vs. Planning, Power vs. Welfare*, New York: Council on Foreign Relations, 1939.

5) Quincy Wright, *A Study of War*, Chicago: The University of Chicago Press, 1942; “International Law and the Balance of Power,” *The American Journal of International Law*, Vol.37, No.1, 1943, pp.97-103; “National Security and International Police,” *The American Journal of International Law*, Vol.37, No.3, 1943, pp.499-505; “United Nations: Phrase or Reality?” *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.228, 1943, pp.1-10; “Peace Problems of Today and Yesterday,” *The American Political Science Review*, Vol.38, No.3, 1944, pp.512-21; Robert M. MacIver, *Toward an Abiding Peace*, New York: Macmillan, 1943; Eugene Staley, “Book Review: Nicholas J. Spykman’s *America’s Strategy in World Politics*,” *The American Economic Review*, Vol.32, No.4, 1942, pp.893-8.

6) William B. Munro, “Present-Day Forces in European Politics,” *The American Scholar*, Vol.3, No.2, 1933, pp.187-93; Charles K. Leith, “Mineral Resources and Peace,” *Foreign Affairs*, Vol.16, No.3, 1938, pp.515-24; Esther C. Brunauer, “Power Politics and Democracy,” *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.216, 1941, pp.109-16.

7) Walter Lippmann, “After Geneva: The Defense of the Peace,” *The Yale Review*, Vol.27, No.4, 1938, pp.649-63; *U.S. Foreign Policy: Shield of the Republic*, Boston: Little, Brown & Company, 1943; *U.S. War Aims*, Boston: Little, Brown & Company, 1944; Frederick L. Schuman, “War, Peace, and the Balance of Power,” *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.210, 1940, pp.73-81; *Design for Power: The Struggle for the World*, New York: Alfred A. Knopf, 1942; “The Dilemma of the Peace-Seekers,” *The American Political Science Review*, Vol.39, No.1, 1945, pp.12-30; Lionel Gelber & Robert K. Gooch, *War for Power and Power for Freedom*, New York: Farrar & Rinehart, 1940; Carl Becker, “How New Will the Better World Be?” *The Yale Review*, Vol.32, No.3, 1943, pp.417-39.

8) 立場Cのパワー論については、前掲拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(2)」の30頁、および後掲文献リスト、参照。

9) Harold D. Lasswell, *Propaganda Technique in the World War*, New York: Alfred A. Knopf, 1927; *World Politics and Personal Insecurity*, New York: McGraw-Hill, 1935; “The Garrison State,” *The American Journal of Sociology*, Vol.46, No.4, 1941, pp.455-68.

なお、リベラリズムの伝統とプラグマティズムの方法論の親和性については、Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America: An Interpretation of American Political Thought since the Revolution*, Harcourt, Brace & World, Inc., 1955, p.10, pp.58-9. (邦訳、有賀貞訳『アメリカ自由

主義の伝統 - 独立革命以来のアメリカ政治思想の一解釈 - 講談社、1994年、27頁、89 - 90頁); Clinton Rossiter, *Conservatism in America: The Thankless Persuasion*, Second edition, revised, New York: Vintage Books, 1962, p.214. (邦訳、アメリカ研究振興会訳『アメリカの保守主義 - 伝統と革新との交錯 - 』有信堂、1964年、178頁) および前掲拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(1)」<sup>1)</sup>、14頁、参照。

10) 立場Gのパワー論については、前掲拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(2)」<sup>2)</sup>、33 - 4頁、および後掲文献リスト、参照。

11) 例えば、立場Gのシュトラウス・ヒューペは42年の著書において、ドイツ地政学の類推から政治戦略を構想することは、何も「冷血な現実主義」あるいは「パワーそのものが目的であるパワー・ポリティクス」を強調するものではなく、「国家の成功のチャンスである現実主義」の重要性を喚起するためである、と自らの信念を明示的に表明している (Robert Strausz-Hupé, *Geopolitics: The Struggle for Space and Power*, New York: G.P. Putnam's Sons, 1942, pp.vi-xii, pp.3-47)。

また同様に、立場Gのスパイクマンの42年の著書における以下のようなアメリカ対外政策への提言は、第二次世界大戦後のアメリカ対外政策の展開を考えるならば、当時としては極めて示唆に富むものである。すなわち、スパイクマンは、彼が提示したところの各々の「パワー・ゾーン」に対するアメリカの政治参加の方法として、まず第1に、欧州のそれに対しては、アメリカが「地域外構成員」であるところの「地域的國家連合」を創設し、それを通じた勢力均衡政策、第2に、極東のそれに対しては、将来的に大国となる中国を牽制するために日本を支援する勢力均衡政策、第3に、西半球のそれに対しては、二国間関係の重視、をそれぞれ提言している。

12) ここで彼らが批判する「孤立主義」とは、パワーの現実を無視し、パワー・ポリティクスから逃避しようとする主張する考え方であり、抑制的な外交を主張する本稿における立場Dに直接向けられたものではない。

なお、立場Gは同様の文脈でパワー・ポリティクスへの不断の関与を主張する立場から、立場DおよびFがパワー・ポリティクスへの選択的関与を主張している点を批判するが(例えば、スパイクマン、シュトラウス・ヒューペ)、この時期における彼らの主要な批判の矛先は、彼らによって国際主義・干渉主義的とされた立場A、BおよびCに向けられている点が特徴的である。

13) モーゲンソーは、次のように立場AおよびBを批判している。まず立場Aのマッキーバーに対する書評論文(44年)の中で、「意見を異にする学派」(dissenting school of thought)と自称したモーゲンソーは、パワー・ポリティクスを理性・法律・倫理の対極に置くりベラリストのパワー論には同意できないとして、これを「悪を志向するパワー・ポリティクス」(power politics for evil)と「望ましい諸目的を志向するパワー・ポリティクス」(power politics for desirable objectives)との対立の中で捉えたいと主張している (Hans J. Morgenthau, "Book Review: Robert M. MacIver's *Towards an Abiding Peace*," *The Journal of Political Economy*, Vol.52, No.1, 1944, pp.91-2)。

またモーゲンソーは、シュワーツエンバーガーに対する書評論文(42年)の中で、シュワーツエンバーガーとともに立場B(2)のシューマンの議論を取り上げ、「政治的・社会的改革によってパワー・ポリティクスを廃絶しようと考えている」と批判している (Hans J. Morgenthau, "Book Review: Georg Schwarzenberger's *Power Politics*," *The American Journal of International Law*, Vol.36, No.2, 1942, pp.351-2)。

なお、イギリス人研究者であるシュワーツェンバーガーのパワー論がアメリカ国際理論研究に本格的に登場するのは、筆者が調査した限りにおいて、51年の著書（Georg Schwarzenberger, *Power Politics: A Study of International Society*, Second edition, London: Stevens, 1951.）以降であるとの理由から、本稿においてはこれを簡単に言及するにとどめた。

- 14) Staley, op.cit., 1942, pp.893-8.
- 15) Nicholas J.Spykman, “Letters to the Editors: Geopolitics,” *Life*, January 11, 1943, p.2.
- 16) 立場Dのパワー論については、前掲拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(2)」<sub>30</sub> - 1頁、および後掲文献リスト、参照。
- 17) Charles A. Beard, *The Idea of National Interest: An Analytical Study in American Foreign Policy*, New York: Macmillan, 1934, esp., pp.410-39; *A Foreign Policy for America*, New York: Alfred A. Knopf, 1940, esp., pp.3-18, pp.36-46, pp.134-54; Charles A. Beard & Mary R. Beard, *The American Spirit*, New York: Macmillan, 1942, pp.550-94. (邦訳、高木八尺・松本重治訳『アメリカ精神の歴史』岩波書店、1954年、232 - 60頁)。
- 18) 立場Eのパワー論については、前掲拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(2)」<sub>31</sub> - 2頁、および後掲文献リスト、参照。
- 19) Reinhold Niebuhr, *Christianity and Power Politics*, New York: Charles Scribner's Sons, 1940, p.26, pp.59-62, p.123, p.131, pp.138-44; *The Children of Light and the Children of Darkness: A Vindication of Democracy and a Critique of Its Traditional Defense*, New York: Charles Scribner's Sons, 1944, pp.153-90. (邦訳、武田清子訳『光の子と闇の子 - キリスト教人間観によるデモクラシー及びマルキシズムの批判 - 』新教出版社、1948年、211 - 56頁)。
- 20) Carl J. Friedrich, *Foreign Policy in the Making: The Search for a New Balance of Power*, New York: W.W. Norton, 1938, pp.38-9, pp.116-59, pp.186-222, p.255.
- 21) Grayson L. Kirk, “Postwar Security for the United States,” *The American Political Science Review*, Vol.38, No.5, 1944, pp.945-55; “The Future Security of the United States,” *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol.21, No.3, 1945, pp.270-6; “National Power and Foreign Policy,” *Foreign Affairs*, Vol.23, No.4, 1945, pp.620-6.
- 22) John H. Herz, “Power Politics and World Organization,” *The American Political Science Review*, Vol.36, No.6, 1942, pp.1039-52.
- 23) アメリカのリベラリズム的伝統を、あらためて西洋世界の政治思想に投影させることによって比較検討するニーバーの視座が明確に示されている論考としては、例えば、Reinhold Niebuhr, “Liberalism: Illusions and Realities,” *New Republic*, July 4, 1955, pp.11-3. 参照。  
またニーバーは44年の著書において、アメリカのリベラリズム的伝統の修正を試みようとした例として「現実主義的な国際思想学派」である立場Gのスパイクマンの勢力均衡論を挙げている（Niebuhr, op.cit., 1944, pp.173-4. 前掲邦訳書、239 - 40頁）。
- 24) 立場Fのパワー論については、前掲拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(2)」<sub>32</sub> - 3頁、および後掲文献リスト、参照。
- 25) Frederick S. Dunn, *Peaceful Change: A Study of International Procedures*, New York: Council on Foreign Relations, 1937, pp.8-15.  
ダン、このようなパワー・ポリティクスに対する「偏見」の例として、「パワー」を軍事力あるいは強制力とみなし、主として戦争との関連性を強調する立場Aのシューマンの33年の著書を挙げている（*Ibid.*, pp.8-10）。
- 26) William T.R. Fox, *The Super Powers: The United States, Britain, and the Soviet Union:*

- Their Responsibility for Peace*, New York: Harcourt, Brace & Company, 1944, pp.4-5.
- 27) Edward M. Earle, "Book Review: Quincy Wright's *A Study of War*," *The American Political Science Review*, Vol.37, No.1, 1943, pp.150-3.
- 28) Edward M. Earle, "Power Politics and American World Policy," *Political Science Quarterly*, Vol.58, No.1, 1943, pp.94-106.
- 29) この点については、Edward M. Earle, "American Military Policy and National Security," *Political Science Quarterly*, Vol.53, No.1, 1938, pp.1-13; "National Defense and Political Science," *Political Science Quarterly*, Vol.55, No.4, 1940, pp.481-95; "National Security and Foreign Policy," *The Yale Review*, Vol.29, No.3, 1940, pp.444-60; "Political and Military Strategy for the United States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol.19, No.2, 1940, pp.112-9; "The Threat to American Security," *The Yale Review*, Vol.30, No.3, 1941, pp.454-80; "American Security: Its Changing Conditions," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.218, 1941, pp.186-93; Earle, *op.cit.*, 1943, pp.94-106; Harold Sprout, "Book Review: Nicholas J. Spykman's *America's Strategy in World Politics*," *The American Political Science Review*, Vol.35, No.5, 1942, pp.956-8; "The Role of the Great States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol.21, No.3, 1945, pp.284-91; Harold Sprout & Margaret Sprout, eds., *Foundations of National Power: Readings on World Politics and American Security*, New Jersey: Princeton University Press, 1945 pp. vi-vii, p.5, p.732. および前掲拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(2)」、33頁、参照。
- 30) Sprout & Sprout, *op.cit.*, 1945, pp. v-vii, p.5, p.732.
- 31) Fox, *op.cit.*, 1944, pp.8-11
- 32) Wright, *op.cit.*, 1944, pp.512-21.
- 33) Lippmann, *op.cit.*, 1938, pp.649-63; Lippmann, *op.cit.*, 1943, pp.1-9, pp.100-8, pp.161-77; Lippmann, *op.cit.*, 1944, pp.63-95, pp.131-54, pp.191-5.
- 34) Gelber & Gooch, *op.cit.*, 1940, pp.3-32.
- 35) Becker, *op.cit.*, 1943, pp.417-39.
- 36) Schuman, *op.cit.*, 1940, pp.73-81.
- 37) Schuman, *op.cit.*, 1942, esp., pp.290-309.
- 38) Schuman, *op.cit.*, 1945, pp.12-30.

## パワー論をめぐる7潮流(文献リスト)

### 《立場A》

- Becker, Carl (1937) "Loving Peace and Waging War," *The Yale Review*, Vol.26, No.4, pp.649-68.
- MacIver, Robert M.(1943) *Toward an Abiding Peace*, New York: Macmillan.
- Russell, Frank M.(1936) *Theories of International Relations*, New York & London: D. Appleton-Century Company.
- Schuman, Frederick L.(1931) *War and Diplomacy in the French Republic: An Inquiry into Political Motivations and the Control of Foreign Policy*, New York: McGraw-Hill.
- (1933) *International Politics: An Introduction to the Western State System*, New York & London: McGraw-Hill.

- (1936) "Book Review: Frank H. Simonds and Brooks Emeny's *The Price of Peace* & Frank H. Simonds' *American Foreign Policy in the Post-War Years*," *The American Journal of International Law*, Vol.30, No.1, pp.172-4.
- Staley, Eugene (1935) *Foreign Investment and War*, Chicago: The University of Chicago Press.
- (1937) *Raw Materials in Peace and War*, New York: Council on Foreign Relations. (邦訳、山田文雄訳『国際原料資源論』中央公論社、1940年)
- (1938) "Power Economy versus Welfare Economy," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.198, pp.9-14.
- (1939) *World Economy in Transition: Technology vs. Politics, Laissez-Faire vs. Planning, Power vs. Welfare*, New York: Council on Foreign Relations.
- (1942) "Book Review: Nicholas J. Spykman's *America's Strategy in World Politics*," *The American Economic Review*, Vol.32, No.4, pp.893-8.
- Wright, Quincy (1921) "The Control of Foreign Relations," *The American Political Science Review*, Vol.15, No.1, pp.1-26.
- (1922) *The Control of American Foreign Relations*, New York: Macmillan.
- (1930) *Mandates under the League of Nations*, Chicago: The University of Chicago Press.
- (1934) "Is the League of Nations the Road to Peace?" *The Political Quarterly*, Vol.5, No.1, pp.92-106.
- (1935) *The Causes of War and the Conditions of Peace*, New York: Longmans, Green & Company.
- (1936) "National Sovereignty and Collective Security," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.186, pp.94-104.
- (1942) *A Study of War*, Chicago: The University of Chicago Press.
- (1943) "International Law and the Balance of Power," *The American Journal of International Law*, Vol.37, No.1, pp.97-103.
- (1943) "National Security and International Police," *The American Journal of International Law*, Vol.37, No.3, pp.499-505.
- (1943) "United Nations: Phrase or Reality?" *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.228, pp.1-10.
- (1944) "Peace Problems of Today and Yesterday," *The American Political Science Review*, Vol.38, No.3, pp.512-21.

《立場B》

= 立場B(1) =

- Brunauer, Esther C.(1941) "Power Politics and Democracy," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.216, pp.109-16.
- Leith, Charles K.(1938) "Mineral Resources and Peace," *Foreign Affairs*, Vol.16, No.3, pp.515-24.
- Munro, William B.(1933) "Present-Day Forces in European Politics," *The American Scholar*, Vol.3, No.2, pp.187-93.

= 立場B(2) =

- Becker, Carl(1943) "How New Will the Better World Be?" *The Yale Review*, Vol.32, No.3, pp.417-39.



- Gelber, Lionel & Robert K. Gooch (1940) *War for Power and Power for Freedom*, New York: Farrar & Rinehart.
- Lippmann, Walter (1915) *The Stakes of Diplomacy*, New York: Holt.
- (1917) *The Stakes of Diplomacy*, Second edition, New York: Holt.
- (1938) "After Geneva: The Defense of the Peace," *The Yale Review*, Vol.27, No.4, pp.649-63.
- (1943) *U.S. Foreign Policy: Shield of the Republic*, Boston: Little, Brown & Company.
- (1944) *U.S. War Aims*, Boston: Little, Brown & Company.
- Schuman, Frederick L. (1940) "War, Peace, and the Balance of Power," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.210, pp.73-81.
- (1942) *Design for Power: The Struggle for the World*, New York: Alfred A. Knopf.
- (1945) "The Dilemma of the Peace-Seekers," *The American Political Science Review*, Vol.39, No.1, pp.12-30.

《立場C》

- Lasswell, Harold D.(1927) *Propaganda Technique in the World War*, New York: Alfred A. Knopf.
- (1935) *World Politics and Personal Insecurity*, New York: McGraw-Hill.
- (1941) "The Garrison State," *The American Journal of Sociology*, Vol.46, No.4, pp.455-68.

《立場D》

- Beard, Charles A. (1914) *Contemporary American History: 1877-1913*, New York: Macmillan.
- (1934) *The Idea of National Interest: An Analytical Study in American Foreign Policy*, New York: Macmillan.
- (1940) *A Foreign Policy for America*, New York: Alfred A. Knopf.
- & Mary R. Beard (1942) *The American Spirit*, New York: Macmillan. (邦訳、高木八尺・松本重治訳『アメリカ精神の歴史』岩波書店、1954年)
- Beard, Charles A.(1943) *The Republic: Conversations on Fundamentals*, New York: The Viking Press. (邦訳、松本重治訳『アメリカ共和国 - アメリカ憲法の基本的精神をめぐって - 』みすず書房、1988年)

《立場E》

- Carr, Edward H.(1939) *The Twenty Years' Crisis 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London & New York: Macmillan.
- Friedrich, Carl J.(1938) *Foreign Policy in the Making: The Search for a New Balance of Power*, New York: W.W. Norton.
- Herz, John H.(1942) "Power Politics and World Organization," *The American Political Science Review*, Vol.36, No.6, pp.1039-52.
- Kirk, Grayson L.(1944) "Postwar Security for the United States," *The American Political Science Review*, Vol.38, No.5, pp.945-55.
- (1945) "The Future Security of the United States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol.21, No.3, pp.270-6.
- (1945) "National Power and Foreign Policy," *Foreign Affairs*, Vol.23, No.4, pp.620-6.
- Niebuhr, Reinhold (1940) *Christianity and Power Politics*, New York: Charles Scribner's Sons.

----- (1944) *The Children of Light and the Children of Darkness: A Vindication of Democracy and a Critique of Its Traditional Defense*, New York: Charles Scribner's Sons. (邦訳、武田清子訳『光の子と闇の子 - キリスト教人間観によるデモクラシー及びマルキシズムの批判 - 』新教出版社、1948年)

Sharp, Walter R. & Kirk, Grayson L. (1940) *Contemporary International Relations*, New York: Farrar & Rinehart.

《立場F》

= 立場F(1) =

Emeny, Brooks (1934) *The Strategy of Raw Materials: A Study of America in Peace and War*, New York: Macmillan.

----- (1937) "Raw Materials: Share or Lose?" *The American Scholar*, Vol.6, No.4, pp.421-34.

----- (1943) *Mainsprings of World Politics*, New York: Foreign Policy Association.

Simonds, Frank H. (1931) *Can Europe Keep the Peace?* New York & London: Harper & Brothers.

----- (1933) *America Faces the Next War*, New York & London: Harper & Brothers.

----- (1935) *American Foreign Policy in the Post-War Years*, Baltimore: The Johns Hopkins Press.

Simonds, Frank H. & Brooks Emeny (1935) *The Great Powers in World Politics: International Relations and Economic Nationalism*, New York: The American Book.

----- & ----- (1935) *The Price of Peace: The Challenge of Economic Nationalism*, New York & London: Harper & Brothers.

Vagts, Alfred (1941) "The United States and the Balance of Power," *The Journal of Politics*, Vol.41, No.4, pp.401-49.

= 立場F(2) =

Dunn, Frederick S. (1937) *Peaceful Change: A Study of International Procedures*, New York: Council on Foreign Relations.

Earle, Edward M. (1923) *Turkey, the Great Powers, and the Bagdad Railway: A Study in Imperialism*, New York: Macmillan.

----- (1938) "American Military Policy and National Security," *Political Science Quarterly*, Vol.53, No.1, pp.1-13.

----- (1940) "National Defense and Political Science," *Political Science Quarterly*, Vol.55, No.4, pp.481-95.

----- (1940) "National Security and Foreign Policy," *The Yale Review*, Vol.29, No.3, pp.444-60.

----- (1940) "Political and Military Strategy for the United States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol.19, No.2, pp.112-9.

----- (1941) "The Threat to American Security," *The Yale Review*, Vol.30, No.3, pp.454-80.

----- (1941) "American Security: Its Changing Conditions," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.218, pp.186-93.

----- (1943) "Book Review: Quincy Wright's *A Study of War*," *The American Political Science Review*, Vol.37, No.1, pp.150-3.

----- (1943) "Power Politics and American World Policy," *Political Science Quarterly*, Vol.58, No.1, pp.94-106.

- Feis, Herbert (1938) "Raw Materials and Foreign Policy," *Foreign Affairs*, Vol.16, No.4, pp.574-86.
- Fox, William T.R.(1944) *The Super Powers: The United States, Britain, and the Soviet Union: Their Responsibility for Peace*, New York: Harcourt, Brace & Company.
- Sprout, Harold & Margaret Sprout (1939) *The Rise of American Naval Power: 1776-1918*, New Jersey: Princeton University Press.
- & -----(1940) *Toward a New Order of Sea Power: American Naval Policy and the World Scene: 1918-1922*, New Jersey: Princeton University Press.
- Sprout, Harold (1942) "Book Review: Nicholas J. Spykman's *America's Strategy in World Politics*," *The American Political Science Review*, Vol.35, No.5, pp.956-8.
- (1945) "The Role of the Great States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol.21, No.3, pp.284-91.
- & Margaret Sprout, eds.(1945) *Foundations of National Power: Readings on World Politics and American Security*, New Jersey: Princeton University Press.

《立場G》

- Morgenthau, Hans J.(1939) "The Resurrection of Neutrality in Europe," *The American Political Science Review*, Vol.33, No.3, pp.473-86.
- (1942) "Book Review: Georg Schwarzenberger's *Power Politics*," *The American Journal of International Law*, Vol.36, No.2, pp.351-2.
- (1944) "Book Review: Robert M. MacIver's *Towards an Abiding Peace*," *The Journal of Political Economy*, Vol.52, No.1, pp.91-2.
- Spykman, Nicholas J.(1933) "Methods of Approach to the Study of International Relations," *Proceedings of the Fifth Conference of Teachers of International Law and Related Subjects*, Washington: Carnegie Endowment for International Peace, pp.58-81.
- (1934) "States' Right and the League," *The Yale Review*, Vol.24, No.2, pp.274-92.
- (1938) "Geography and Foreign Policy(1)," *The American Political Science Review*, Vol.32, No.1, pp.28-50.
- (1938) "Geography and Foreign Policy(2)," *The American Political Science Review*, Vol.32, No.2, pp.213-36.
- (1939) "Geographic Objections in Foreign Policy(1)," *The American Political Science Review*, Vol.33, No.3, pp.391-410.
- (1939) "Geographic Objections in Foreign Policy(2)," *The American Political Science Review*, Vol.33, No.4, pp.591-614.
- (1942) *America's Strategy in World Politics: The United States and the Balance of Power*, New York: Harcourt, Brace & Company.
- (1943) "Letters to the Editors: Geopolitics," *Life*, January 11, p.2.
- (1944) *The Geography of the Peace* (edited by Helen R. Nicholl), New York: Harcourt, Brace & Company.
- Strausz-Hupé, Robert (1942) *Geopolitics: The Struggle for Space and Power*, New York: G.P. Putnam's Sons.
- (1945) *The Balance of Tomorrow: Power and Foreign Policy in the United States*, New York: G.P. Putnam's Sons.

Wolfers, Arnold (1940) *Britain and France between Two Wars: Conflicting Strategies of Peace since Versailles*, New York: Harcourt, Brace & Company.

-----(1940) "Some Aspects of Foreign Policy," *The Yale Review*, Vol.30, No.1, pp.16-33.

-----(1942) "Angro-American Post-War Coöperation and the Interests of Europe," *The American Political Science Review*, Vol.36, No.4, pp.656-66.

-----(1945) "The Role of the Small States in the Enforcement of International Peace," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol.21, No.3, pp.292-9

**付記：本稿は、平成17年度島根県立大学学術教育特別助成金（研究テーマ：国際理論研究におけるパワー概念の「アメリカ的受容」）による研究成果の一部である。**

**キーワード：国際政治 戦間期 アメリカ 権力 パワー パワー・ポリティクス  
国力 勢力均衡 安全保障 リベラリズム 現実主義 デモクラシー**

(AKASAKA Ichinen)

# 英 文 抄 訳

Abstracts

## American Acceptance of 'Power' Concept in the Study of International Theory (3): Divergence and Convergence in Power Controversies

AKASAKA Ichinen

This is the third installment of a series of papers with which I aim to clarify the peculiarity of the American acceptance of *power* concept in the study of international theory. In my previous papers, I attempted an interpretation that the concept of *power* had been awakened and accepted in the American international theory during the interwar period, especially between the late 1930s and the early 1940s, and then I classified the divergent *power* theories and identified the pluralistic characteristics and relativity between them.

The purpose of this study is to examine these dynamics of *power* controversies which are described as 'divergence' and 'convergence.' Firstly, the significant issue to be pointed out is a philosophical 'divergence' between American liberalism and European conservatism. According to my classification, the former are Position A (an advocate of collective security), Position B (a devotee of democracy) and Position C (an advocate of policy science), and the latter is Position G (an advocate of balance of power, backed by European idea of power politics).

Secondly, from the standpoint of 'convergence,' Position D (an adherent who treats domestic affairs as a matter of highest priority), Position E (an adherent of sublation [*aufheben*] who criticizes and corrects various extremisms or reconciles opposing concepts), and Position F (an advocate of national security) played a substantial role in converging *power* controversies.

This paper finds that in the early 1940s when a series of policy controversies for post-war order persisted, Position A and B have shifted to the assertion of confirming the ubiquity, necessity, and inevitability of power politics in terms of the conditions reflecting American values or interests. Then, a certain consensus among participants in the controversies stood out in relief. As a result, I can extract conclusions that the characteristics of the American acceptance of *power* concept are as follows:

- 1) Consciousness of the ubiquity, necessity, and inevitability of power politics.
- 2) Awareness of the leading role of government as an important actor exercising *power* or ensuring national security.
- 3) Treating *power* as an instrument of foreign policy advocating and enhancing American values or interests (e.g. freedom, democracy and so on).
- 4) Emerging consensus-building to use American *power* for stabilizing international society in the light of fulfilling responsibility as a great power.

- 5) Hoping to selectively engage in power politics after deliberation upon American security, setting aside the question of security policies or measures.